

も

この出来栄を担保する方法として、しゅくみを整備する考え方と、ひとを信頼する考え方がある。ISOの品質マネジメントシステムなどは、契約社会のアングロサクソンによって生み出されたしゅくみの典型であろう。ひとに頼るよりはしゅくみを構築する方が近代的であり合理的であると見做されているようである。大学教育もそのような傾向にあり、一学期の講義は必ず十五回行うようにという強制的な指示が、全国の大学で今なされている。建築の講義には様々な分野があるが、全ての分野において十五回で一つのまとまりとすることが適切であるとは、到底考えられない。十五回の講義を受講すれば一つの単位を取得するというしゅくみであり、誰が教えるかは問題とされていない。そのようなしゅくみを進めれば、ハーバードのマイケル・サンデル教授のような講義は期待できないであろう。そもそも、しゅくみによるコントロールは、形式に陥る危険性がある。

公共工事などでは、誰が造っても、設計図どおりに造れば同じものが出来上がるという前提のしゅくみで発注が行われている。価格競争は必要であろうが、その結果、よりよいものを造ろうというインセンティブが働きにくいしゅくみになっている。近年の総合評価による選定には、技術者の評価が入っているものの、その人の、よりよい物を造ろうとする意欲は評価されていない。しゅくみのもつ限界である。

各 人 各 説

「しゅくみ」か「ひと」か

首都大学東京 都市環境学部 教授

深尾精一

Seiichi Fukao



このような状況では、建設業界を支える人材は育ちににくいのではないだろうか。建設現場でも、以前は現場所長をはじめとして、技術者がさまざまな創意工夫をしてもの造りを行っていたが、そのような傾向が減ってきたと聞く。

そのような事態の打開の方法として、建設に携わったひとを何らかの形で記しておくというのはいかがであろうか。日本には、古来、建築主の名とともに、大工棟梁の名を棟札に記し、小屋裏の普段は目につかないところに残しておく風習があった。古建築では、それとは別に、携わった職人の名前などの痕跡が、小屋裏の部材などに残されていることもある。自分の作品であるということを他人に誇るためではなく、己が造ったという自負を留めたかったのである。

そのように、出来上がった建造物のどこかに、工事に携わった人の痕跡を残してはどうだろうか。目立たなくて、知る人ぞ知るところに記せばよい。よい仕事をしたはずだという思いを何らかの形で残すことができれば、責任をもったよい仕事をする意欲が増すであろう。公共工事を担う土木の分野では、設計者さえも表に出すのはいかがなものかという声もあるというが、人材育成の点からみても、有効ではないだろうか。へたなししゅくみよりも、ひとに期待するほうが、結果として、よりよい社会資産を残すことにつながると私には思えるのだが。